国語―一　二〇二五年度　東洋英和女学院中学部　入学審査問題Ｂ

受験番号

氏名

一　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは黄色の解答用紙に書きなさい。字数の指定のある問題は句読点も一字と数えます。

　大正十三年、町へ引っ越した。それまでは多少とも草木のある土地にいたのだが、この引っ越しで、芽の出るもの、葉のしげるものとの縁は切れてしまった。けれども、それでも当時の町はまだまだ、1今よりは柔らかみのある家並みだった、といえようか。貸家でも、門のある家なら、玄関わきと小庭の隅には、かならずのように八ツ手だとか、青木といった類が形ばかりにしろ、植えてあった。**ロジ**の両側にならんだ、門のない長屋でも、軒下になにか青いものがあり、手まめな家ではわずか**イッシャク**の出窓の下に、朝顔をまいて這いあがらせ、それも不可能なうちでは、夏は縁日で羊歯、しのぶを買い、庇からつり下げて、せめてもの青い葉をたのしむ人がいくらもいた。

　私たちの引っ越したうちは、門こそ［　］ばかりのものがついていたが、やはり貸家の、粗末なものだった。玄関わきに白い一重の花の椿が一本、茶の間の前に、かなめもちが一本、隅に椎が一本、[注1]ばさけた連翹がひと株、それだけだった。

　いっそ何もないのならまだまし、なまじに一本ずつの木が三本、ひよひよと生きているというのでは、茶の間に座っていて、目の安めどころがなかった。家族はみな、それまで住んでいた家の庭を恋しく思い、草木にaがつえたような思いをもって、不服をいった。2それなのに父は、木を買って植えようとは思わない、といった。そこは盛り土がしてあり、以前の表土の上に木屑や石くれが積んであるので、植えても木は枯れるだろうし、枯れていく木を眺めていられるほど自分の神経は、むごくはないのだ、というのである。もっともだと思って、みながもう何もいわなくなった。そして何年かたった。

　その間にだれかが芭蕉をもってきたり、榊をくれたり、どうだんがきたり、3庭は寄り合い世帯で、ともかく少しずつ青さがふえた。私は嫁にいって一度そとへ出たが、はなれてまた帰ってきた。女の子を連れて帰ったのである。父なし子になってしまった孫娘に、祖父はあわれをかけてくれた。

　そのころ町にはよく縁日がたって、人々は植木や鉢ものをbひやかすのが好きだった。父は私に、娘をそこへ連れていけ、という。町に育つおさないものには、縁日の植木をみせておくのも、草木へ関心をもたせる、かぼそいながらの一手段だ、というのだった。水を打たれた枝や葉は、カンテラの灯にうつくしく見え、私は娘の手をひいて、植木屋さんとはなしをした。「これだけしゃべらせて、なんだ、買ってくれねえのか」といわれたりすると4娘は私の手をかたく握って、引っ張った。

　春、植木市がたつ。お寺の境内へ、かなりな商品が運びこまれ、ちょっとした市なのである。父は私にガマロを渡して、娘の好む木でも花でも買ってやれ、という。汗ばむような、晴れた午後だった。娘がほしいといいだしたのは、藤の鉢植えだった。それは花物では、市のなかのcお職だった。鉢ごとでちょうど私の身長と同じくらいの高さがあり、老木で、あすあさってには咲こうという、蕾の房がどっさり付いていた。子供は、てんから問題にならない高級品を、無邪気にほしがったのである。子供だからこそ、[注2]おめず臆せずねだるが、聞かずとも知れる高価である。とてもガマロの小銭で買えるものではない。もちろん私は買う気などなくて、子供と藤のふつりあいなおかしさを笑ってすませ、藤の代わりに赤い草花をどうかとすすめた。子供はそれらの花は、以前にもう買ったことがあるとしりぞけ、小さい山椒の木を取った。お職の藤から一度に大下落の山椒だった。ほしいものが買ってもらえなくて、わざと安値のものを嫌味にすねたのではない。彼女はさんしょの葉としらすぼしを、醤油でいりつけたのをごはんにぱらぱらとまき、お菜に玉子焼きをつけたお弁当が、大好きだったからなのである。藤でなくても、山椒でも子供は無邪気に喜んでいた。私もそれでよい、と思ってうたがわなかった。

　ところが夕方書斎からでてきた父が、［　］不機嫌になった。藤の選択はまちがっていない、という。市で一番の花を選んだとは、花を見るたしかな目をもっていたからのこと、なぜその確かな目に応じてやらなかったのか、藤は当然買ってやるべきものだったのに、という。そういわれてもまだ私は気がつかず、それでも藤はバカ値だったから、と**ベンカイ**すると父は**真顔**になっておこった。好む草なり木なりを買ってやれ、といいつけたのは自分だ、だからわざと自分用のガマロを渡してやった、子は藤を選んだ、だのになぜ買ってやらないのか、金が足りないのなら、ガマロごと[注3]手金にうてばそれで済むものを、おまえは親のいいつけも、子のせっかくの選択も無にして、平気でいる。なんと浅はかな心か、しかも、藤がたかいのバカ値のというが、5いったい何を物差しにして、価値をきめているのか、多少値の張る買い物であったにせよ、その藤を子の心の養いにしてやろうと、なぜ思わないのか、その藤をきっかけに、どの花をもいとおしむことを教えてやれば、それはこの子一生の心のうるおい、女一代の目の楽しみにもなろう、もしまたもっと深い機縁があれば、子供は藤から蔦へ、蔦からもみじへ、松へ杉へと関心の芽をのばさないとはかぎらない。そうなればそれはもう、その子が**ザイサン**をもったも同じこと、これ以上の価値はない、子育ての最中にいる親がだれしも思うことは、どうしたら子のからだに、心に、いい養いをつけることができるか、とそればかり思うものだ、金銭を先にうんぬんして、子の心の栄養を考えない処置には、あきれてものもいえない――6さんざんにきめつけられた。

　藤の代わりに買いあたえた山椒が、叱られたあとの感情をよけいせつなくした。**イッシャク**五寸ほどの貧弱な木だが、鮮緑の葉はもめば高い香気をはなち、かめば鋭い味をひろげ、とげは容赦なく刺した。だれの

ためにあがなった木だろうと、思わされた。だが、叱られたのは身にしみたが、さればといってその後私が心を改め、縁日のたびに子に花のたのしさをコーチしたのではない。とかくルーズなのである。

　子は大きくなっていった。花を見ても、きれいだというだけ、木を見ても、大きな木ねというだけ、植物にはそれ以上は心が動かないようだった。世話をして花を咲かすなどは、面倒（めんどう）そう。庭木の枯れ枝を一本切るにさえ、しぶりがちである。ほかには優しい心をもつほうなのだが、野良犬（のらいぬ）にふみたおされた小菊（こぎく）を、おこしてやろうともしない固（かた）さなのである。草木をいとおしまぬ女が、どんなに味気ないものか、子ながらうとましく思う時もあった。話しても説いても、心が動かないようだった。それまでも私は、あの時の藤でチャンスを失ったらしいと、後悔（こうかい）することが度々あったのだが、いまさらながら7この責任は自分にある、とつらい思いをした。いくら辛（つら）く思っても、もうおそかった。

　年々四季はめぐる。芽立ち、花咲き、みのり、枯れおちる。そのことあるたびに心はいたんだ。が、そのまま娘は人のもとへ縁付いた。孫がうまれた時、この子は草木をいとおしむ子になれと、ひそかに祈（いの）った。子に怠（おこた）ったことを、孫でつとめたいと思った。

　けれども、8私のおもわくはがらりと外れた。いいほうに外れたのである。思いがけないことに、娘の夫は花を好み、木を育てようとする人だった。土をいじり、種をまいて喜ぶのである。子がうまれ、結婚生活が落ちついてから、その趣味（しゅみ）というか心柄（こころがら）というかが、やっと形になって現れはじめたのである。意外な感じがしたのだが、もっと意外だったのは、そういう夫につれて娘もしみじみと花をみつめ、芽をいとおしむ気をもったことだった。ほっとして、私はもう孫のことも安心した。

　そのころから、しきりに、一度はどこかへ藤の花をたずねたい、と思うようになった。追憶（ついおく）でもあり、あの藤のときの詫（わ）び心でもあり、改めて藤に**見参**しようという気もあっての思いたちだった。

（幸田文『木』）

【注】

1　ばさけた　＝　ばさばさに乱れた

2　おめず臆せず　＝　気おくれしたりおじけづいたりしないで

3　手金にうてば　＝　前金をはらえば

問一　本文中の太字の**カタカナ**は漢字に直し、**漢字**は読みをひらがなで答えなさい。

問二　1今よりは柔らかみのある家並みだった　とありますが、どのような様子だったというのですか。次の**ア**～**エ**の中からもっともよくあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

ア　人々がそれぞれの家に合わせて緑を育てるゆとりがあった様子

イ　門や小庭や出窓のない家では緑を楽しむのに苦労していた様子

ウ　長屋住まいの人々でさえ植物を育てるお金に困らなかった様子

エ　人々が花や木を好みおたがいに植物をながめては喜んでいた様子

問三　本文中の□にもっともよく当てはまることばを次の**ア**～**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　身　**イ**　気　**ウ**　名　**エ**　手

問四　aかつえた　bひやかす　cお職　のここでの意味としてもっともよくあてはまるものをそれぞれ次の**ア**～**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

a　かつえた

ア　なつかしく心ひかれる　**イ**　あってうんざりする　**ウ**　うえて満たされない　**エ**　目ざわりでいらだつ

b　ひやかす

ア　育てて売りに出す　**イ**　商品を見て評価する　**ウ**　思うぞんぶん買い物をする　**エ**　買う気がないのに品物を見る

c　お職

ア　よく目立つもの　**イ**　もっともよいもの　**ウ**　いちばん古いもの　**エ**　ごく手近なもの

問五　２それなのに父は、木を買って植えようとは思わない、といった　とありますが、なぜですか。解答らんに合うように二十五字以内で説明しなさい。

問六　３庭は寄り合い世帯で　とありますが、どのような意味ですか。次の**ア**〜**エ**の中からもっともよくあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

ア　庭に統一性がなく様々な植物が植えられていること
イ　庭に前の家から持ってきた植物が植えてあること
ウ　庭は様々な植物が助け合って成立しているということ
エ　庭はめずらしい植物がひしめき合っているということ

問七　４娘は私の手をかたく握って、引っ張った　とありますが、この時の「娘」の気持ちとして**あてはまらない**ものを次の**ア**〜**エ**の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大人の男の人に自分たちの態度をけなされたはずかしさ
イ　親切なだけではない大人を見てしまったことへのおそろしさ
ウ　植木屋さんに説明されたのに商品を買わない申し訳なさ
エ　植木屋さんの口調がどんどんあらくなることへのおどろき

問八　本文中の［　　］にもっともよく当てはまることばを次の**ア**〜**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　じりじり　**イ**　はやばや　**ウ**　みるみる　**エ**　ありあり

問九　５いったい何を物差しにして、価値をきめているのか　とありますが、「私」と父の「物差し」がどのようにちがっていたというのですか。次の文の（　Ⅰ　）（　Ⅱ　）に入る語を文中から探してそれぞれ四字以内でぬき出して答えなさい。

私は、（　Ⅰ　）を価値の基準としていたが、父は（　Ⅱ　）を基準にしていたということ。

問十　６さんざんにきめつけられた　とありますが、ここではどのような意味ですか。もっともよくあてはまるものを次の**ア**〜**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　父の思いをたんたんと伝えられた
イ　私の希望もきかずに決定された
ウ　いいわけもできないほどしかられた
エ　注意しても仕方ないと見捨てられた

問十一　７この責任　とありますが、娘がどのようになったことに対していっているのですか。本文中から十字以内でぬき出し、解答らんに合わせて書きなさい。

問十二　８私のおもわくはがらりと外れた　とありますが、

(1)　「私のおもわく」の内容を、具体的に説明しなさい。
(2)　「がらりと外れた」とはどのようなことか、具体的に説明しなさい。

二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問八以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問八の答えは［国語―六］の解答らんに書きなさい。字数の指定のある問題は句読点も一字と数えます。

【注1】SNSは承認欲求を駆り立てる。こういう話になると必ず返ってくるのは、「じゃあSNSなんかやめればいいじゃないか」という意見です。はい、きっとみなさんも聞いたことありますよね。しかし、1私にはこうした意見に与することができません。

SNSをやめればいいじゃないか、という意見は、現実の人間関係がSNSと接続していない人の考えです。［A］、SNSがなくても人間関係が成り立っており、友達がいなくならない人の考えです。2もしかしたら、SNSネイティブではない世代、具体的にはZ世代（＝1990年代後半から2010年代初めごろに生まれた世代）よりも上の世代の人々にとってはそれが当然なのかもしれません。「人間関係とは、まず現実の社会生活のなかで作られるものであり、SNSはすでに確立された人間関係のなかで用いられるコミュニケーション手段の一つにすぎない。そして、コミュニケーションの手段はSNSだけではないのだから、もしSNSをやめたとしてもそれがすなわち人間関係の解消を意味するわけではない」。そんなふうに考えられていそうです。

しかし、このような考えは、SNSネイティブの世代にとってはほとんど説得力がないものでしょう。なぜなら、そうした世代の人々にとっては「LINEのIDを交換する」「インスタを相互フォローする」ということが事実上の人間関係の開始を意味するのであり、現実の人間関係とSNS上の関係性を区別することはできないからです。

［B］、「そもそも承認欲求など持つべきでは**ア**ない」という観点から批判が寄せられるかもしれません。自分のアイデンティティは自分自身で確立するべきであって、自分のアイデンティティの拠り所を他者からの承認に求めようとすると、結局、3依存と不安と疎外の泥沼に陥ってしまう。それは本人にとってまったくハッピーなことではない――そのような意見を持っている人は、世間には結構多いのではないでしょうか。

このような考え方は、「他者に依存することはよくないことであり、自分自身で物事を決められることのほうが尊重されるべきだ」という価値観を前提にしています。これは、哲学の言葉を用いるなら、「自律性」を重視する発想と言えます。それに対して、他者に依存し、他者なしでは生きていけなくなってしまうことは「他律性」と呼ばれます。

自律性とは「自分を自分で律することができる」ということであり、一方、他律性とは「他者に律される」、つまり他者の言いなりになってしまうということです。

はい、また難しい言葉使いやがったな、と思いました？　それについてはすみません。でも、内容は簡単です。他者に頼らないでいられることが自律性、他者に頼らないではいられ**イ**ないことが他律性です。ね、簡単でしょ？

私たちは多くの場合、自律性こそが大切だと教えられて育ちます。私も小学生のころは「自分で考え、自分で行動しよう」と先生にいつも言われていました。何かがわからなくて答えを聞こうとすると、「まずは自分で考えてみなさい」と怒られたものです。

［C］、自律性と他律性が、まるで水と［　］のように、決して交わることなく対立するものとして捉えられるなら、そうした考え方には疑問の余地があります。たとえば「自律的であるためには他律的であってはならず、また他律的であるならば決して自律的ではない」という考えは、おそらく私たちの現実を反映したものではありません。なぜなら人間は、自分ひとりの力では、自分のアイデンティティを形成することも、認識することもでき**ウ**ないからです。

アイデンティティとは、言い換えれば「自分は何者なのか」「自分にはどんな可能性があるのか」ということについての自分なりの理解です。

たとえば子どもは、大人からさまざまな可能性を提示され、それを一つ一つ試していくことによって、自分を少しずつ知っていくことになります。

ある子どもが歌をうたったとき、そばにいた大人がそれを聞き、うれしそうに微笑んだとしましょう。するとその子は、「自分には歌をうたうことができるんだ。そしてそれによって、他の人を喜ばせることもできるんだ」と気がつきます。そうした、他者とのかかわりからもたらされる気づきの蓄積が、「自分は何者なのか」「自分には何ができるのか」というアイデンティティの形成には欠かすことができないのです。

子どもは、まわりの大人から世話や関与を受けることなしに生きていくことはできません。その意味で、子どもは自分を育ててくれる大人たちに対して他律的です。しかし、その他律性は、子どもの人生から自律性を奪い去ることを決して意味しません。むしろ反対に、自律性とはそうした他律性のなかからしか育まれてこ**エ**ないものなのです。

つまり、4自律性と他律性はつながっています。私たちは、自分が何者であるかを知り、自分のアイデンティティを確立するために、どうしても他者の力を借りなければならないのであり、それは決してよくないことではなく、むしろ人が成長していく上で自然なあり方なのです。

同じことが、子どもだけでなく大人についても言えます。大人もまた、他者の影響を受けながらアイデンティティを形成するのです。そして、大人にとってのそうした他者の代表例が、友達です。

たとえばみなさんは、受験や、クラブなどへの申し込み、何かの活動などのために、自分の性格や長所を書類に書いて提出しなければならなく

なったとき、何を書いたらいいのかわからなくなることはありませんか。そんなときに有効な対処法の一つは、友達にアイデアを書いてもらう、という方法です。そうして書かれたものを見て、「なるほど、自分にはこういう長所があるのか」と、はじめて自分の個性に気づかされることはよくあることです。

　反対に、私が友達に長所を書いてあげたことも何度かあります。私としては、その友達の長所としてはあまりにもあたりまえなことを書いているつもりなのに、それを読んだときの友達の顔は、たいていの場合はうっすらとした驚きに包まれています。それくらい、私たちは自分のことをよくわかっていないのです。

　おそらく、ここに「承認」の持つもっとも基本的な働きが表れています。すなわち、「自分が他人にどのような人として見られ、受け入れられているかを知ることによって、自分が何者であるかを知る」ということです。そうした形で「自分が何者であるのかを知りたい」と望むことこそ、承認欲求にほかならないのではないでしょうか。

　とはいえ、承認欲求は依存・不安・疎外の泥沼に人をひきずりこんでいく力も持っています。そのなかで苦しみ、疲れ果ててしまって、自分のアイデンティティがわからなくなり、自律性を奪われ、自尊心を傷つけられている人も多いかもしれません。

　ここに、別の問いが立ち現れることになります。

　私たちは生きていく上で他者からの承認を必要とします。5しかし、承認欲求はときとして有害なものになります。では、私たちは「他者からの承認」という事柄に対して、どのような態度をとるべきなのでしょうか。自分の承認欲求をどのようにコントロールしていけばよいのでしょうか。

（戸谷洋志『SNSの哲学　リアルとオンラインのあいだ』）

【注】

1　SNS ＝ ソーシャルネットワーキングサービスを略して言ったもの。インターネット上で交流したり、情報を共有したりできるサービスのこと。本文中の「LINE」「インスタ」もSNSにふくまれる。

問一　1私にはこうした意見に与することができません　とありますが、どのようなことを言っているのですか。もっともよくあてはまるものを次の**ア**～**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　SNSに依存することが友達を失うことにつながる、という意見には共感しないということ。

イ　SNSはコミュニケーション手段としてふさわしくない、という意見には反対しないということ。

ウ　SNSは承認欲求を高めてしまうのでやめた方がよい、という意見には賛成しないということ。

エ　SNSは人間関係を成り立たせるために必要なものだ、という意見には同意しないということ。

問二　[A]～[C]にあてはまることばを次の**ア**～**オ**の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし記号は一度しか使えません。

ア　だから　**イ**　つまり　**ウ**　しかも　**エ**　または　**オ**　ただし

問三　2もしかしたら、SNSネイティブではない世代、具体的にはZ世代（＝1990年代後半から2010年代初めごろに生まれた世代）よりも上の世代の人々にとってはそれが当然なのかもしれません　とありますが「SNSネイティブ」の世代と「SNSネイティブではない」世代の考えはどのようにちがうと言っていますか。もっともよくあてはまるものを次の**ア**～**エ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　SNSネイティブの世代では人間関係の確立にSNSが重要な役割を果たしているが、それより上の世代ではSNSと現実の人間関係は区別されているということ。

イ　コミュニケーションの手段はSNSだけではないと考えるSNSネイティブではない世代に対して、Z世代ではSNS以外の手段を受け入れられないということ。

ウ　SNSネイティブの世代ではSNSは承認欲求を満たすための手段として使われているが、それより上の世代ではそのようにSNSを使うことはないということ。

エ　現実の人間関係とSNSが接続していることはSNSネイティブにとっては当然のことだが、それより上の世代では社会生活を豊かにするものとされているということ。

問四　本文中の**ア**～**エ**の「ない」のうち、はたらきのちがうものを一つ選び、記号で答えなさい。

国語―六

B

受験番号

氏名

問五　3依存と不安と疎外の泥沼に陥ってしまう　とありますが、どうなってしまうというのですか。それを説明している一文を本文中から探し、はじめの五字を書きなさい。

問六　水と□　とありますが、空らんに入る語を漢字一字で考えて答えなさい。

問七　4自律性と他律性はつながっています　とありますが、なぜそう言えるのですか。解答らんに合うように二十字以内で説明しなさい。

問八　5しかし、承認欲求はときとして有害なものになります。では、私たちは「他者からの承認」という事柄に対して、どのような態度をとるべきなのでしょうか　とありますが、他者から承認されたいと思うことの良い面と悪い面について、あなたの体験をもとにして説明しなさい。体験したことがなければ、見聞きしたことや、想像したことでもよいです。ただし、SNSの例を用いてはいけません。